

# 王船山「倣昭代諸家體（三十八首）」所収の「劉護軍基（秋興）」詩について

鈴木敏雄

一

明末清初の詩人王船山（王夫之、一六一九—一六九二）に「倣昭代諸家體（三十八首）」という一連の七言律詩がある。梁の江淹に效つて「倣……体」型の擬作を試みたもので、明代の著名な詩人三十八人を取り上げ、模倣によりそれぞれの詩体を顕彰しているものと考えられる。今、その中で王船山が劉基（一三一—一三七五）を筆頭に挙げ、その詩体の特徴を「秋興」という題で捉えている点に注目してみたい。<sup>1)</sup>

王船山「倣昭代諸家體（三十八首）」

劉護軍基（秋興）

括蒼雲繞縉雲都 括蒼 雲は繞る縉雲の都  
萬簇芙蓉翠色鋪 万簇の芙蓉は翠色鋪く  
紅雨濕飛鳥柏薄 紅雨は湿りて鳥柏の薄きを飛ばし

碧波晴點鷺痕孤  
登樓有賦依州牧

長揖無門傲酒徒

不識故園他日淚  
蘋花還送暗香無

碧波は晴れて鷺痕の孤なるを点ず  
樓に登りて賦する有るは州牧に依<sup>2)</sup>  
り  
長く揖して門無きは酒徒たるを傲<sup>3)</sup>  
る<sup>4)</sup>

識らず故園 他日の涙  
蘋花 還た暗香を送るや無しやを

詩中に見える「括蒼・縉雲」は劉基の故郷であるから、秋の物思いに託して登樓の王粲・酒徒の酈食<sup>れいしょく</sup>其<sup>き</sup>のように故郷・故国を思う劉基を王船山は捉え、その詩体を顕彰しているものと思われる。

この「倣……体」型擬作詩は、詩題の「秋興」の他に、詩句中に「故園」や「他日淚」といった語が見えるので、明らかに杜甫「秋興（八首）」の、例えば其一（「秋興（三首）」其一）、

玉露凋傷楓樹林、巫山巫峽氣蕭森。江間波浪兼天湧、  
塞上風雲接地陰。叢菊兩開他日淚、孤舟一繫故園心。  
寒衣處處催刀尺、白帝城高急暮砧。

（玉露は凋傷す楓樹の林、巫山巫峽は氣蕭森たり。江間の波浪は天を兼ねて湧き、塞上の風雲は地に接して陰る。叢菊は両つながら開く他日の涙、孤舟は一つのみ繫ぐ故園の心。寒衣は処々に刀尺を催し、白帝城は高くして暮砧を急にす。）

以下の一連の作を想起するように出来ている。とすると、そこから王船山が劉基を、杜甫「秋興」詩風の作を物す詩人であると看做していたことが見えてくる。ではなぜ劉基の詩体を、選りに選って杜甫「秋興」詩風のものとして顕彰したのか。果たして劉基自身は確かに杜甫「秋興」詩風の作を物す詩人であったのか、といった疑問が浮かび上がってくる。

そもそも、杜甫「秋興」詩風の作とはどのようなものか。

周知のごとく杜甫は国内の乱れを避け、生活の場を長江の兩岸迫る峡谷の町、四川東端の夔州にまで求めて流浪漂泊している。そしてそこに二年間滞在する。大暦元年（七六六）、杜甫五十五歳のことで、「秋興（八首）」はそこで京華を思つて詠まれたとされる。

その杜甫「秋興」詩の特徴の捕捉は、例えば許總『詩學發微』に詳しい（以下、紙幅を取るが、概ね加藤国

安氏『杜甫論の新構想』の訳語を参照させて頂きつつ、邦訳で引用する）。

例えば、「秋興八首」其四は、前六句まで、今日の長安の政局をいつているのに、第七句で突然夔州の秋景となり、末尾の第八句では、昔日の長安への思いにすりかわる。わずか八句の中で、今日の長安―現在の夔州―昔日の長安へと展開し、その時空間は決して一時一地の景物ではない。かつ伝統的な時間の連続性も、空間的漸進性の形式もすっかり打破されてしまっている。ために時空間と意境の重層的広がりが生まれ、「上句を読んでも、下句の内容が分からない」（宋・吳沆『環溪詩話』卷上）といった非連続性を有する。これが、杜甫がその晩年に伝統詩歌の美的構造に対して行つた、大胆な改造と刷新だつた。さらに「秋興八首」其五の末尾の二句「滄江歲晚」と「青瑣朝班」、また「秋興八首」其八のやはり末尾の二句「綵筆氣象」と「白頭低垂」を見ると、両者の時空間の関係は、一見無関係なものの集合のようであり、また時空間の漸進的でスムーズな展開を変じて、対峙的並列な型にしていることが分かる。こうした非連続物同士の結合は、表面上は個々のイメージを孤立させてしまうかのようにだが、当時の詩人の置かれた状況に即して考えると、全く正反対である。前述したように、夔州期の杜甫は、目前の困

苦の中で往時への回想を誘引し、現在と過去、また現実と追想とが交々織り成す内面世界の豊かな連関性により、これらの孤立的イメージの相互間に自由に駆け巡ることのできる広大な空間を創造したのだ。それが背景にあるために、詩句全体の意味としては、個別的意味の総和を遥かに凌駕するほどになる。杜甫のこの独特な内面性から生まれた飛躍の思惟が、すべての創作の根源にあることにより、往時を追憶して今昔を対比するという類いの内容以外にも、同様の詩的手法が再三にわたり用いられる。杜甫晩期の詩歌の特色ある芸術性は、こうした彼の内面性と、その芸術手法の多方面にわたる運用の結果として表れてきたといえよう。

この許總氏の指摘によれば、時空間が「一時一地の景物事件に非ざる」ことによる上下句の非連続性が、杜甫「秋興」詩の最大の特徴ということになる。

今、許總氏の説に借りとすると、冒頭に挙げた、当の王船山の「倣……体」型擬作「劉護軍基（秋興）」詩も、その「一時一地の景物事件に非ず」という杜詩風の特徴を備えているかどうかが先ず問題となろう。

その点はどうであるのかと言え、劉基自身は先ず「括蒼の劉基」を自称している。括蒼（当時の台州、今の浙江省麗水市）とその西の縉雲（当時の処州）はともに劉基の故郷と言って好い土地であるから、王船山の擬作詩

の前半は明らかに劉基の故郷を詠んでいることになる。では、詩の後半の「樓」や「門」はどこに在るものか。劉基で例えば「南樓」と言えば、彼が客となつて身を寄せた越（紹興）の王氏のそれ等が想起させられるが、王船山の擬作に於いては詳らかでない。ただし、いずれにしてもそこで、「故園」（故郷）の「蘋花」を思っているのであるから、少なくとも他郷にあるものであることは明らかである。とすると、やはり視点は故郷の秋景色から詠み始めつつも、必ずしも非連続とは言えないまでも、場所是他郷に移っており、「一時一地の景物事件に非ず」の特徴は荷なわされているものと思われる。

ここに、王船山の擬作の意図が、劉基の七言律詩に於ける杜甫「秋興」詩風の特徴を顕彰することに在り、それを基調とした詠こそが劉基に最も特徴的な詩体であると看做そうとしたものであろうことが見えてくる。或いは時を憂え世を憤る杜甫「秋興」詩風の特徴を持つ劉基の詩体こそが、明詩を切り拓く明詩開明期の筆頭詩人にふさわしいものとして、王船山は意義を見出だそうとしていたのではない。

## 二

では実際に、劉基自身の詩の中にも杜甫「秋興」詩風の「一時一地の景物事件に非ず」のような特徴が見出だされるのだろうか。

今ここに、劉基の詩と杜詩との関連を指摘した陳書祿氏の論考『明代詩文的演變』（江蘇教育出版社、一九九六）がある。杜甫「秋興」詩との関連にも言及しているのので予め見ておきたい（次に、拙訳により示したい）。

……劉基の憂鬱なる眼光の中で最も注意すべき点は、二つである。一つは元末の横暴な徴収が造成した、「農夫は田に力めて秋の至るを望み、雨に沐し風に梳けづり尽く勞瘁す。王租未だ了らざるに私債多く、……農夫田父の愁ひ何ぞ極まらんや」（「野田黃雀行」）という悪い成果の指摘である。二つ目は連年の戦争が造成した、「天弧は天狼を射るを解せず、戦骨縦横に路傍に満つ」（「感興」七首其六）、「平民は乱を避けて山谷に入り、蓬を編み屋を作りて環堵無し。故里を回り看れば尽く荊榛、野鳥は食を争ひて声怒り喚る。盜賊も官軍も齊しく劫掠し、去るも住まふも其の身を容るる所無なし」（「雨雪曲」）という災難の指摘である。時を憂え世を憤る劉基の作は、往々にして目撃しては詩を成し、事に感じては作っており、「実録」と称されるに堪え得る。「感時述事（十首）」詩等の如きは、時を憂え世を憤ること杜甫の「秋興（八首）」詩に似、時の弊を譏り刺すこと白居易の「新樂府（五十首）」詩に似ている。汪端『明三十家詩選』初集卷一に引く程孟陽の評は「感時述事」詩を『時に感ずる』の諸詩は、詩史と謂ふべし、

追つて杜老に配し、元・白に邁<sup>まさ</sup>れり」と言っている。

この指摘によれば、「（劉基の）『感時述事（十首）』詩等の如きは、時を憂え世を憤ること杜甫の『秋興（八首）』詩に似ている」とある。それならば、劉基「感時述事（十首）」詩こそが杜甫「秋興」詩風の作なのかと言えば、それは長編の五言古詩であつて、短いものでも一首が二十八句、長いものでは一首が四十八句にもわたつて詠まれており、杜甫「秋興（八首）」詩が整然とした一篇八句の七言律詩であるのとは、テーマ設定はさて置き、形式上では明らかにほど遠く、「似ていない」。それに用語面に於いても、例えば劉基「感時述事（十首）」其一では、

天王有萬國、撫治不能遍。百僚分所司、控制寄方面。  
旬宣貴浹洽、付託屬隆眷。易置苟無恒、勤怠朝夕變。  
自非穀氏儔、何官匪郵傳。矧茲世多故、軍府希間宴。  
戎機一以失、蟻穴債臺殿。公庭委舊事、書牘呈新選。  
來者且遲遲、在者同秋燕。偷安待日至、退託從私便。  
姦貪遂乘隙、民病孰與唁。大臣國柱石、憂喜相連纒。  
反躬既遭闕、何以率州縣。寄與要津人、有舌未宜燕。

というような詠み方がされる。すなわち、「時を憂え世を憤る」際の表現に、「百僚」「官」「軍府」「民病」等の直接時事に触れる語が散見でき、逆に言えば、「農夫」「平民」「官軍」等のような直接的な話のあまり現れない

い杜甫「秋興（八首）」詩の特徴に反し、用語面でもやはり「似ていない」。

勿論、この「感時述事（十首）」其一には、「一時一地の景物事件に非ず」という特徴も備わっていない。すなわち、王船山の観点に照らせば、テーマ設定は別として、劉基「感時述事（十首）」詩は明らかに杜甫「秋興」詩風の作には該当しないことになる。

では、王船山の観点と仮定する「一時一地の景物事件に非ず」の特徴を備えた杜甫「秋興」詩風の作が、これとは別に劉基には有るのだろうか。先ずは形式上であれば、七言律詩であることが望まれる。

それともう一つ、今、テーマ設定を別にしたが、テーマで言うと、王船山の擬作詩は直接「時を憂え世を憤る」というものではない。また、従来指摘されている「重農主義」が劉基の主要テーマの一つにあるが、王船山が取り上げたのは、それでもない。前述したように異郷に在って故郷を詠むことから生まれてくる感情をテーマとしている。

そこで今、右掲のような異郷に在って故園故郷への思いを詠み、且つ「一時一地の景物事件に非ず」の杜甫「秋興（八首）」詩風の特徴を持つ作が劉基に実際に有るかどうかを、今暫く詩題の「秋興」を手がかりに探ってみると、例えば、劉基「次韻和謙上人秋興（七首）」詩が先ずはそれに該当するかと思われる。ただし、七首全てというよりも、其一、其三あたりが敢えて言えば「似ている」

のではないか。

劉基「次韻和謙上人秋興（七首）」其一<sup>7)</sup>

一自中原萬馬奔	一たび中原に万馬奔りてより
江淮今有幾州存	江淮今幾州か存する有らん
龍韜豹略癡兒戲	龍は韜み豹は略りて痴兒戯れ
穠李天桃猛士門	穠李天桃は猛士の門なり
廢壘秋風銷戰骨	廢壘の秋風は戰骨を銷し
荒郊夜雨泣冤魂	荒郊の夜雨は冤魂を泣かす
江湖愁絶無家客	江湖愁絶す家無きの客
佇立看天淚眼昏	佇み立ち天を看て涙眼昏し

「雨」「涙」といった王船山の擬作との共通語彙も幾つが見られるが、とりわけ、前半では故郷を含む「江淮」地方の景物および出来事を詠み、後半では徐々にそれが悪化し変貌していくさまを寓居地に在って愁えている点に於いて、王船山の擬作詩との類似性が指摘できるものと思われる。

ではそこに、杜甫「秋興」詩風の、時空間が「一時一地の景物事件に非ざる」ことによる上下句の非連続性は認められるのか。

初句で黃河流域の「中原」の兵乱の勃発を指摘した後、すぐ直後には今自分が寓居している杭州や越（紹興）とといった「江淮」の地の悪化を詠んでいる。そして結二句で「家」を離れ「江湖」にて故郷を思う設定を採ってい

る。というのであれば、非連続性とまでは直ちには認めがたいものの、「一時一地の景物事件に非ず」という特徴は具えていると言つて好いのではないか。

以上は其一についてであるが、其三では次のように詠む。

劉基「次韻和謙上人秋興（七首）」其三

霜飛大野氣淒清　霜は大野に飛びて氣は淒しく清く  
日落荒村少客行　日は荒村に落ちて客の行くこと少

なし

投筆班超空食肉　筆を投ずるの班超は空しく肉を食

し

登樓王粲獨傷情　樓に登るの王粲は独り情を傷まし

む

海墻雨翳旌旗影　海墻の雨は旌旗の影を翳ひ

淮甸雲埋鼓角聲　淮甸の雲は鼓角の声を埋む

中夜起瞻天北極　中夜起きて天北の極みを瞻れば

鬢毛蕭颯憶神京　鬢毛蕭颯として神京を憶ふ

「登樓の王粲」は王船山も擬作詩で取り上げている典

故であるが、この詩でも劉基は自分を班超・王粲になぞらえ、「淮甸」地域の兵乱を詠みつつ、憶いを「神京」に馳せている。やはり「一時一地の景物事件に非ず」の特徴が見られると言えよう。

そもそもこの劉基「次韻和謙上人秋興（七首）」詩も、

杜甫「秋興（八首）」詩を濫觴とする。それは、例えば杜甫が「秋興（八首）」其六（宮詞「秋興（五首）」其三）で、

瞿唐峽口曲江頭、萬里風煙接素秋。花萼夾城通御氣、芙蓉小苑入邊愁。珠簾繡柱圍黃鶴、錦纜牙樯起白鷗。迴首可憐歌舞地、秦中自古帝王州。

（瞿唐の峽口曲江の頭、万里の風煙素秋に接す。花萼の夾城は御氣を通じ、芙蓉の小苑は辺愁を入れる。珠簾の繡柱は黃鶴を囲ひ、錦纜の牙樯は白鷗を起たしむ。首を迴らせば憐れむべし歌舞の地の、秦中は古へより帝王の州なるを。）

と詠み、四川東端の夔州の瞿唐峽口と戦乱のただ中に在る秦中長安の曲江とを非連続に接続させたような「一時一地の景物事件に非ざる」詠み方を、それほど鮮明な非連続ではないものの、中原や京師と江淮とで承ける点に、やはり承け継がれている。すなわち「似ている」と言い得るその「一時一地の景物事件に非ず」の特徴を供与されている。

では、このような詠み方の詩篇は、劉基の詩全体を覆う一特徴と言えるほど、劉基に於いては多々現れるのであろうか。

劉基の「秋興」詩には、謙上人に和した七律二篇のほかにも、七絶（二首）、五律が更にそれぞれ一篇ずつ有る。

今それらを見るに、一々挙げずとも、いずれも「似ていない」。

そこでさらに、劉基の詩全体を見渡してみると、「秋興」ではなく、「秋」を「春」に換え、やはり季節の変化に応じて景物や出来事の変貌することを詠む劉基「春興（七首）」が、杜甫の「秋興（八首）」に幾分「似ている」とに気づく。もちろん杜・劉両者はそれぞれに境涯を異にしており、また文学上の主張や手法も異なるであろうから、酷似などとは到底言えるものではないものの、ともに故郷故国を思い、古今を思い、此処彼処を思うというテーマ設定に於いて「似ている」と思われる。

この劉基「春興（七首）」は、越（紹興）の王文明（王氏）のところに故郷台州の兵乱を避けて寓居していた時に、会稽山や鏡湖に臨んで詠んだものと思われる。劉基は故郷からここに家族を連れて移り住み、詩会にも参加していた。そこでは、客裳を着、客愁を感じ、帰計を案ずると詠み、旅に在って流浪漂泊の身と言うに等しい思いを抱いている。例えば其一を見ると、

劉基「春興（七首）」其一

柳暖花融草滿汀	柳暖かく花融けて草汀に満ち
日酣烟淡麥青青	日酣に烟淡く麦青々たり
枝間好鳥鳴求友	枝間の好鳥は鳴きて友を求め
水底寒魚陟負萍	水底の寒魚は陟りて萍を負ふ
異縣光陰空荏苒	異県の光陰は空しく荏苒と

故郷蛇豕尚羶腥  
感時對景情何極  
悼往悲來總涕零

故郷の蛇<sup>だ</sup>豕は尚ほ羶腥たり  
時に感じ景に對して情何ぞ極らん  
往くを悼み來たるを悲しみて総て  
涕零つ

と詠んでいる。詩中に「感時」や「涕零」の語が見えることから、言うまでもなく杜甫を踏まえるが、時節の変化に伴い、「異県」の風光から「故郷」へと思いが馳せ、現在から以前へと思いが溯り、両者が重なりあつて、それほど鮮明ではないにせよ、「一時一地の景物事件に非ず」の特徴を呈していると思われる。

今、例として其一を挙げたが、この劉基「春興（七首）」詩は、他に其三も王船山の擬作「劉護軍基（秋興）」詩の基調になっていると言ひ得る特徴を持つ。また、その他の何首かにも「登樓」や「蘋」を始め、「蒼」「雲」「遠（繞）」「都」「翠」「色」「雨」「濕」「飛」「波」「故」「園」「涕」「花」「香」等、擬作詩と共通の語彙が多く見られることから、語彙面では全般的に「似ている」と言うことができ、王船山が基調としたものの一つに数えて好いと思われる。因みに語彙面の共通性のみで言えば、同様のことは前掲の劉基「次韻和謙上人秋興（七首）」全体についてもある程度は言えることである。

なお、これらの他にもまだその特徴を備えているものがあるかという点、もはやそれほど多くない。例えば、これもともに越（紹興）に寓居していた時の作であろう、

劉基「感興（七首）」其七か「夏日雜興（七首）」其三を次に挙げる程度に止まる。

劉基「感興（七首）」其七

天上九關森虎豹  
人間七澤起龍蛇  
塵埃不辨風雲色  
雨露全歸枳棘花  
秦國有人迷鹿馬  
周郊無土載蟲沙  
淮瀆何日歌常武  
腸斷嚴城戍鼓颺

天上の九關は虎豹を森さかかにし  
人間の七沢は龍蛇を起おこす  
塵埃は風雲の色を弁ぜず  
雨露は全て枳棘の花に帰す  
秦國には人の鹿か馬かに迷ふ有り  
周郊には土の虫沙を載する無し<sup>(10)</sup>  
淮瀆は何れの日にか常武を歌はん<sup>(11)</sup>  
腸断たれ城を嚴めて戍鼓颺つ

劉基「夏日雜興（七首）」其三

聞道中原沸似糜  
倚楹長嘯不勝悲  
百年城郭連烽火  
千里菜麻委蒺藜  
南國久紆方叔旆  
東郊未返魯侯旗  
五湖何處堪垂釣  
腸斷松楸入夢思

聞くならく中原は沸くこと糜かに似  
たると  
楹に倚り長嘯して悲しむに勝へず  
百年の城郭は烽火を連ね  
千里の桑麻は蒺藜に委ぬ  
南國は久しく紆ひふ方叔の旆<sup>(12)</sup>  
東郊は未だ返らず魯侯の旗  
五湖は何れの処か釣を垂るるに堪  
へんや  
腸断たれ松楸は夢に入りて思はる

これら二首に於いては、「感興（七首）」其七の方は中原（九關）と（楚地方の七澤と）淮瀆とを詠み、「夏日雜興（七首）」其三の方は中原と南國とを詠んでいる。ここに於いて、数は僅かではあるが、「一時一地の景物事件に非ず」という特徴を備えた詩篇が、劉基には確かに有ることが知られ、さらに異郷と故郷という語で詠んだ「春興」詩は別としても、後の例はいずれも中原と江南とが詠み込まれていることが指摘できる。従つて更にそこからは、劉基がこれらの地域に敢えて言及することの持つ意味が探られよう。

三

擬作「劉護軍基（秋興）」詩に於ける王船山の捕捉を妥当なものであると看做すとすると、数の多寡は措き、劉基自身が前述のような杜甫「秋興」詩風の詩体を求めた理由が何処にあるのかを知る必要が出てくる。恐らくは王船山はそこに焦点を当てて擬作しているよう。

劉基が杜甫に関心を示すようになった経緯は、前掲の陳書祿氏が『明代詩文的演變』の中で次のように説明している（紙幅を取るが、再び拙訳により示したい）。

劉基が「美刺風戒す」という変風変雅説を努めて唱えた理由は、劉基が文学の伝統に対する自分の経



験と社会生活に対する自分の経験とを有機的に結合させ、一つにしようとしたからである。たとえば劉基は「項伯高詩序」で自分がどのようにに体験を交錯させた過程を、次のように述べている。

……予少時讀杜少陵詩、頗恠其多憂愁怨抑之氣。

而說者謂其遭時之亂、而以其怨恨悲愁發爲言辭、烏得而和且樂也。然而聞見異情、猶未能盡喻焉。比五六年來、兵戈迭起、民物凋耗、傷心滿目、每一形言則不自覺其悽愴憤惋、雖欲止之而不可、然後知少陵之發于性情真不得已、而予所恠者、不異夏虫之凝氷矣……

(……予は少きとき杜少陵の詩を読み、頗る其の憂愁怨抑の氣多きを怪しむに、而るに説く者は謂ふ、其れ時の乱れに遭ひ、而して其の怨恨悲愁を以て発して言辭と為せば、烏ぞ得て和やかにして且つ樂しからんや、と。然り而して聞見は情を異にし、猶ほ未だ尽くは焉れを喻る能はず。比る五、六年來、兵戈迭ごも起こり、民物凋耗し、傷心目に満ち、一たび言を形るごとに則ち自らは其の悽愴憤惋なるを覺えざるも、之を止めんと欲すと雖も可ならず、然るのち少陵の性情に発せらるるは真に已むを得ず、而して予の怪しむ所の者は夏の虫の凝氷に異ならざるを知れり。……)(劉基「項伯高詩序」)

杜詩を内部に包括する、文学の伝統と社会の現実とに対する体験の交錯・思考の交錯が、劉基の「美

刺風戒す」という変風変雅説を育て、発展させる一つの重要な契機となつてゐることが明らかになつてゐる。

劉基は自らも兵乱を体験した後、凝氷を語れない夏の虫であつた自分に始めて気づき、さらに王朝衰退を反映する「変風変雅」説による諷刺や怨みを詠む文学の作成を志向するに先だち、世の乱れを食い止められない憂いを、杜甫同様に抱くようになってゐる。それを劉基自身はさらに自らの言葉で次のようにも語る。

劉基「題鮮于伯機書杜工部詩後」

少陵昔避亂、買屋西枝村。卜鄰得贊公、聊可與晤言。  
四郊闕豺虎、煙塵塞乾坤。中宵望北辰、慘戚衰老魂。  
我今亦漂泊、不得歸本根。感此一太息、欲語聲復吞。  
(少陵昔乱を避け、屋を西枝村に買ふ。隣を卜ひて贊公を得、聊か与に晤言すべし。四郊豺虎を闕はせ、煙塵乾坤を塞ぐ。中宵北辰を望み、衰老の魂を惨み戚ふ。我今亦た漂泊、本根に帰るを得ず。此れに感じて一たび太息すれば、語らんと欲して声復た吞む。)

これは書の達人である元の鮮于伯機が書いた杜詩を見、その思いを詩に詠んだもので、兵乱の中に於ける杜甫漂泊の惨みに劉基は共感を示している。

また、劉基「次韻和孟伯真感興」詩では、知人の孟伯

眞に和し、自ら次のようにも語る。

#### 四

劉基「次韻和孟伯眞感興（四首）」其二

無用文章豈療飢 無用の文章は豈に飢ゑを療さん  
勞生筋骨已支離 生を勞するの筋骨は已に支離たり  
窮愁杜甫家何在 愁ひを窮むるの杜甫は家何くにか  
在る

落魄の陳平は計未だ奇ならず

草澤狐狸三窟固

草澤の狐狸は三窟固く

江湖波浪一帆危

江湖の波浪は一帆危し

故園春色年年到

故園の春色は年々到るも

綠葉紅花好爲誰 綠葉紅花好く誰がためにかすや

やはり為す術なく漂泊の愁いを窮める杜甫に共感を示している。これらこそ王船山が求めた劉基の設定するテーマであると考えられる。そしてさらにそれに、「一時一地の景物事件に非ず」という表現の工夫が加わっている。すなわち中原を始めとする兵乱による故國の変貌が南方の故郷故園の変貌をももたらすことに對する憂いである。それは劉基が杜甫同様に漂泊の詩人となる體驗を積んで後に加わつて來た思いであることは、もはや贅言を費やさなくても好いであらう。明詩史の開明期の筆頭に置くにふさわしい詩人として、王船山はそのような形の憂國詩人劉基を顕彰していることになる。

以下は余論になるが、王船山はその『明詩評選』でも劉基を明詩史の筆頭に挙げ、明らかに昭代黎明の詩人と看做している。<sup>15)</sup> そのことは、王船山『明詩評選』と他の幾つかの（清代の）詞華集とを比較してみてもよく分かる。

詩の載録数による簡単な比較ではあるが、例えば陳田『明詩紀事』は、劉基の詩に關しては「平西蜀頌」（四言）、「送張孟兼之山西按察司僉事任」（五古）、「待宴鍾山應制」（七律）、「送黃生莅祀福建」（七律）の四首を載録するのみである。因みに高啓の詩は七首で、載録率が最も高いのは、楊慎の五十九首である。それに馮班と邢昉がそれぞれ五十五首で続く。<sup>16)</sup>

沈德潛『明詩別裁集』も前後七子を第一に載録し、高啓・劉基の詩はその下に置かれる。載録状況は、前七子の李夢陽が四十七首、何景明が四十九首、徐禎卿が二十三首、後七子の李攀龍が三十五首、王世貞が四十首、謝榛が二十六首で、その後高啓が二十一首、劉基が二十首と続いている。<sup>17)</sup>

朱彝尊『明詩綜』は卷二全体を劉基の詩にあて、一百四首を載録する。これは卷八全体を高啓の詩にあて、一百三十八首を載録するのに次いで多い。

これらに対し、王船山『明詩評選』は載録数では劉基を第一に置き、高啓は第二位に置いている。傾向として

は、朱彝尊『明詩綜』と似、明代の一位、二位を劉・高の二人に競わせている。従って、この朱・王両者は載録基準が似ているようにも見える。載録する劉基の詩型の内訳を見ても朱・王両者は類似し、両者ともに五言古詩（全体の約四〇％）と七言近体詩（朱は三〇％弱、王は二〇％弱）を数多く載録している。

しかし更に、両者の五古と七言近体の内訳を見ると、載録されている個々の詩はずいぶん異なっていることに気づく。朱彝尊は比較的長編が多く、王船山はその点で長編は少ない。最も重複数の多い五古でも、「感懷」二首と「旅興」七首の二篇のみが両者で重複し、七言近体に至っては「春興（七首）」其六の一首が重複するのみである。すなわち朱・王が注目する劉基の詩の約五十首中、両者が同じ関心を示した詩篇は十首ほど（全体から見ると一〇％弱）に過ぎず、採詩の興味や観点はずいぶん異なっていることが分かる。

王船山の劉基に対する好みは、『明詩評選』掲載のものに限定すれば、とりわけ載録数の多い五言古詩群に現れている。それは朱彝尊とも僅かに重複する「感懷」「旅興」の両詩篇を始め、朱彝尊の採らない「詠史」詩や「遊仙」詩を載せる点に於いて顕著である。それらは改めて言うまでもなく、「古詩十九首」や阮籍、左思、郭璞を継承する六朝詩風の詩体である。

しかし、「倣……体」型擬作である「劉護軍基（秋興）」詩は七律であって、五古の「旅興（五十首）」詩等とは詩

型およびテーマを異にする。すなわち、王船山の好む劉基の詩と、これぞ劉基の詩体と顕彰しようとするものとは、王船山に於いては異なっていることになる。

実際、劉基の詩集を概観すると、王船山の好む五古よりも七律が圧倒的に多い。すなわち劉基自身は七律を得意としたのではないか。だからこそ、王船山も自らの好みとは異なり、これぞ劉基の詩体と顕彰する際には七律を採り、もつとも劉基らしい、故国の変貌に対する憂いを故郷の変貌に対する憂いと重ね合わせるテーマ設定のものを採り上げたのではないか。

因みに、王船山自身にも「秋興」一首（七十自定稿「乙丑」）がある。この濫觴となるのも言うまでもなく杜甫の「秋興」詩であろうが、しかし、「古今此處彼處を思う」と言われる杜詩とは些か捉え処を異にする。

#### 王船山「秋興」

秋藕線絲綴冷香、蓼花靺鞨染輕霜。月津已轉從雲妬、星渚初離更夜長。臨水登山哀郢客、守庚煉己老丹房。白蘋一罇清泉鏡、風颭霜髭照影涼。

（秋藕は絲を綴りて冷香を綴り、蓼花の靺鞨は輕霜に染まる。月津は已に転じて從雲妬み、星渚は初めて離れて更夜長し。水に臨み山に登れば郢客たるを哀れみ、庚を守り己れを煉れば丹房に老ゆ。白蘋一たび罇に清泉の鏡、風は霜髭に颭ぎて照影涼し。）

杜詩一流の「一時一地の景物事件に非ず」という特徴は、明らかに継承していない。王船山は、劉基は杜甫のそれを継承していると見たが、自らは襲用の必要を思わなかったかも知れない。一方は建国の詩人であり、他方は亡国の詩人である。故国の変貌への憂いと故郷の変貌への憂いとを重ね合わせて詠むことに關しては、兩者の間に流浪漂泊觀の相應の違いが横たわっているように思われる。

## 注

(1) 因みに二番手は高啓の詩体で、「梅花」という題で做っている。

(2) 朱元璋の洪武三年（一三七〇）十一月、劉基は勲官の上護軍を授かり、誠意伯に封ぜられる。ただしこの擬作詩は、護軍となる以前の劉基の事績に基づくものと考えられる。

(3) 劉基に於ける「登樓王粲」の典故の頻用に關しては、姚蓉「山林朝市事相違」二「王粲意象——追尋而漂泊的人生——」（何向榮編「劉基與劉基文化研究」人民出版社、二〇〇八）に詳しい。

(4) 「長揖」の句は、儒者たるを匿して高陽（幽州の保定）の酒徒だと傲り劉邦のもとに参じた酈食其の事を踏まえる。酈食其は劉邦の居所の門閥を無視し、簡単に揖しただけでその策士となり、漢建國に殉じた。ここはそれを劉基に喩える。李白「梁甫吟」に「君不見高陽酒徒起草中、長揖山東隆準公。入門不拜聘雄辯、兩女輟洗來趨風。東下齊城七十二、指揮楚

漢如旋蓬。狂客落魄尚如此、何況壯士當羣雄」とある。この「酒徒」は王船山「答姚夢峽秀才見東作……」詩にも「千古英雄無死處、酒徒高唱感夷門」と見え、また王船山「春興」其一にも見える。

(5) 許總「杜詩學發微」中の「江西詩派杜詩學探微」二——對杜詩的繼承・發展觀——、および「試論聞一多杜詩研究的成就和意義」四による。

(6) 松川健二および吉川幸次郎両氏の指摘に拠る。（『宋明の思想詩』北海道大學圖書刊行會、一九八二）

(7) ここでの「次韻和」は、劉基「次韻和石抹公」詩の詩題のように同時代人に用いられる。

(8) なお、杜甫に「春興」詩は無い（あるいは現存しない）。

(9) 「夏日雜興（七首）」詩は、「五湖」が詠まれているので蘇州を通過した時の作かとも疑われるが、其二に「愛此南園僻有餘、依稀景物似郊居」とあり、やはり紹興の王氏の「南園」での作であることが想定される。

(10) 「虫沙」は、戦死した兵卒、戦死者。『抱朴子』に「周穆王南征久而不歸、一軍皆化、君子爲猿鶴、小人爲蟲沙。」とある。

(11) 「常武」は、周の宣王が自ら師を率いて徐（淮北の夷）を伐ったことを詠む。ここは淮濱の平定をいう。『詩』大雅「常武」に「徐方不回、王曰還歸」とある。

(12) 「方叔」は、南征した周の宣王が、その將の方叔に荊蛮を伐たせたことをいう。『詩』小雅「采芣」に「方叔涖止、其車三千、師干之試」とある。

(13) 「夏虫之凝氷」は、『莊子』秋水の「夏虫語氷」に同じ。

(14) 孟伯眞は、元末の至正年間に在世。閩や泉州等に縁があり、黄鎮成や釋大圭（廖大圭）らと交友があつたらしく、あるいは江西あたりの憲掾であつた人ではないか。著に「漫遊集」があるようである。

(15) 因みに、近人の錢仲聯主編「明清八大家文選叢書」（蘇州大学出版社、二〇〇二）は、劉基を明清に於ける優れた散文家の筆頭に置いている。

(16) 因みに『明詩紀事』辛籤卷十三には王夫之の四十二首を載録する。数からいえば全体で四番目の多さに当たる。

(17) その他、清の汪端『明三十家詩選』は劉基を筆頭に置くが、載録数で言うと九十四首であつて、高啓の一百七十五首、何景明の一百二十五首に次いで、三番手である。